

興亜工業大学と藤原工業大学

小宮 一仁

昭和 11 年、慶應義塾に工学部の新設を目指していた、時の慶應義塾塾長の小泉信三は、工学教育の実態を視察するためにアメリカに渡りました。同じ頃、王子製紙社長の藤原銀次郎もアメリカを視察し、日本の工学教育の遅れを実感していました。我が国の工学教育の充実を求める二人の意見は一致し、慶應義塾の卒業生だった藤原は、将来慶應義塾に寄付することを前提に、私財を投じて、昭和 14 年、工業大学を設立しました。これが日本最初の私立工業大学である、藤原工

業大学です。藤原工業大学は、創立時から慶應義塾と一体的な運営が行われ、当初の予定通り、最初の卒業生を送り出す直前の昭和 19 年夏、慶應義塾に吸収され慶應義塾大学工学部となりました。

小泉と藤原がアメリカに渡る 15 年も前、一人の皇族がヨーロッパにおりました。東久邇宮稔彦王です。パリを中心とするヨーロッパで、七年間の自由な生活を送られた殿下は、フランスの最高学府であるエコール・ポリテクで、政治や外交について広く学ばれた他、モネ、ルノアール、ドガ、クレマンソーといった画家・文人とも親交を深められました。その殿下が、留学中最も強く実感されたのは、欧州と日本の工業技術力の差でした。そこで殿下は帰国後、この留学経験を活かし、欧米に負けない高等工業教育機関の設立を望まれました。これに共感した、教育学者の小原國芳、財閥森コンツェルンの森曉、物理学・金属学者の本多光太郎、哲学者の西田幾多郎、作家の武者小路実篤らは、文部省主導のもと、京都帝国大学総長であった小西重直を初代学長に迎え、昭和

17年、我が国で2つ目となる私立工業大学を創立しました。これが、千葉工業大学の前身である興亜工業大学であります。藤原工業大学の創立に遅れること3年目のことでした。

興亜工業大学と藤原工業大学は、共に我が国の工学教育のレベルアップを目指して設立されたこと、開戦・太平洋戦争そして終戦の時代、創立時から、物資の不足、空襲、学徒動員や数回の校舎移転といった苦難を経験したことなど、境遇が重なる点が数多くあります。しかし、私は、両校の教育理念には、出発点から大きな違いがあったと考えます。すなわち、藤原工業大学が、「実地で役立つ工学教育」を提唱し、アメリカ合理主義の思想を源流として設立されたのに対し、興亜工業大学は世界に貢献する技術者の養成を目的としながらも、科学技術教育と共に、芸術やスポーツの重要性をも教育目標に謳い込むなど、ヨーロッパにおける総合的なエリート養成機関としての大学を目指して設立されました。このことは、創立時に興亜工業大学が全寮制であったことからわかります。

アメリカの大学にもヨーロッパの大学にも学生寮がありますが、アメリカの大学の学生寮が学生の住まいであるのに対し、ヨーロッパの大学の学生寮は、教員と学生が共に暮らし学生を教育する場、学寮・カレッジとして誕生し発達しました。英国最古の大学である、オックスフォード大学とケンブリッジ大学では、学寮・カレッジを中心とした全寮制の教育が、創立から 800 年以上経った現在でも行われています。大学を表す英語のユニバーシティには、学寮・カレッジの集合体という意味があるのです。千葉工業大学の教育目標にある、師弟同行・師弟共生の教育は、まさに、この学寮・カレッジを中心としたヨーロッパのエリート養成教育に繋がるものであると私は考えます。

我が国で最初の私立工業大学であった藤原工業大学は、第 1 期生の卒業を待たず慶應義塾大学に吸収されました。このため、興亜工業大学を前身とする千葉工業大学は、日本で最も長い歴史を有する私立工業大学となり、今日（こんにち）も

その伝統を守り続けています。大学の門をくぐった日から、千葉工業大学の人々は、興亜工業大学の「建学の精神」と、その継承の歴史を担い続けているのです。

令和2年6月28日